

# 図書館ドリフト

甲南大学マネジメント創造学部助教 新井康平

大学（院）生が図書館に行く理由は何なのだろうか。本を借りるためかもしれないし、勉強するためかもしれない。とにかく、図書館を利用している方々の多くは、何らかの理由なり目的なりを持って図書館を利用しているのではないだろうか。だが、図書館を利用するのに実は大層な理由なんかは必要ないのだ、ということを主張するのが、拙稿の重要な目的である。つまり、もっと図書館という場所は、学生たちにとっては近い場所であって欲しいのである。

キャンパス内の学生生活では、エアポケットのように、ぽっかりと時間が空いてしまうことが日常的にあるだろう。一緒に食事をとろうと約束した友人が講義を終えるまでの数十分間とか、突然休講になったために空いてしまった一コマ分の時間とか、必修科目が朝一と4時間目だったりするときの数百分とか。こういう時間にも、図書館は利用されていい。無目的な、あるいはせいぜい時間潰し程度の利用目的でも、図書館は皆さんの来訪を拒絶したりしないのだから。

このように、時間潰し程度の目的でふらりと図書館をおとずれることを、拙稿では「図書館ドリフト」と呼ぼう。ドリフトとは、流されていく、程度の意味である。ただ時間が空いたので何とはなしに図書館に流されていく（ドリフトしていく）ことから、このことを図書館ドリフトと名付けておく。

僕自身が図書館ドリフトを始めたのは、大学生の1年生のときである。突然振り出した雨をやり過ごすためにに入った図書館で、何気なく本棚の間を進んでいたとき、美しい黒髪の女性が本を読んでいる場面に遭遇した。椅子に座ることもなく、本棚から取り出したばかりであろうその本に集中していた彼女は、ページをめくるときと自身の髪をかきあげるとき以外は不動だった。その彼女を含めた図書館内の景色は本当に美しいものだった。その日以降、彼女をもう一度見たいという思いから図書館に足しげく通った青年新

井康平だったが、残念ながら二度と彼女とは会えなかった。そのかわり、図書館ドリフトの様々な価値を発見するに至るのである。

私に対してそうであったように、この図書館ドリフトは、ただ時間をつぶす以上の価値を学生の皆さんにもたらしてくれるに違いない。というのも、図書館にドリフトしていくと、実は人生にとって役に立つかもしれない主に3つの偶然が待っているからである（偶然なので待っていないかもしれないが）。この偶然があるからこそ、僕は皆さんを図書館にドリフトさせたいともいえる。以下では僕自身の個人的な経験を踏まえて、この3つの偶然について解説していこう。

## 1つ目の偶然：新しい知識と出会う

図書館に流されて行くと、何をするだろうか。図書館では会話が出来ないので、多くの場合は個人作業の時間に充てられることになる。あの空間で出来る個人の作業として、最も自然なことは本を読むことだろう。「本を読むぞ!」と意気込んで訪問した訳ではない。だが、本を読むことが自然だと思わせるあの空間では、本を適当に見繕って読むしかない。それこそが、普段は興味がない分野や自分の専門とは違う分野の本に目を通す、数少ないチャンスともいえる。しかも、この種の出会いは運命的なものに発展しやすい。

私自身の会計学という専門を決定づけたのは、友岡賛先生の『歴史にふれる会計学』という書籍にたまたま出会ったからである。当時はマーケティングなどには興味があったが、会計学についてはただの金勘定が、なぜ「学」なんてたいそうなものを名のっているのかくらいの認識だった。ただ、その本にある「概して無味乾燥なイメージをもたれがちな会計ないし会計学というものに、若干の味わいがないし潤い、をあたえたい」という言葉の通り、その本を読み進めて行くうちに、僕は経済学や経営学よりもはるかに深い歴史を持つ会計学の魅力にすっかりはまってしまった。

結局、自分の興味のある分野の本ばかり読んでいても、人生を変えるような劇的な出会いなどには遭遇しにくいかもしれない。だからこそ、このような自分の興味の外にある分野の本を手にとる機会がうまれる図書館ドリフトでは、皆さんの人生に変革を起こす可能性を持っているといえる。

### 2つ目の偶然：新しい刺激に出会う

さて、たとえ、あなたが図書館をドリフトするドリフターズであったとしても、その実、図書館では多くの学生が何らかの目的を持って作業をしている様子に出会うはずである。それは、もしかしたらいささかショッキングな光景であるかもしれない。自分が持っているものを、その他大多数が持っているのだから。図書館にいる多くの人が何をやっているのかをみると、ほとんどの人は勉強をしていることに気がつく。僕の場合も、かたや雀荘で符計算にあけくれていたのと時を同じくして、同年代の何人かが専ら勉強をしていたことを知ることになった。そのときの僕は大学の1年生だったのだが「大学にも入って勉強する人がいるなんて!」と、いまとなってはよくわからないショックを受けたものである。

しかも、彼らが勉強しているものが、大学の勉強ではなく、資格試験のためだったり、とにかく大学の勉強にプラスしたものであったことにさらにショックを受けた。なんで、大学の勉強以外に勉強をするのかが理解出来なかった。だが、彼らの多くが将来を見据えて様々な資格の取得や追加的な勉強をしていることを知り、同じ19歳でここまで差がつくのかと驚愕してしまった。それからというもの、(相変わらず雀荘には行っていた気がするが)とにかく自分の人生がどうなるのかを意識するようになった。結局、自分が大学の教員を目指そうと決意するのはもう少し先の話だが、それでも、あとき図書館で経験した刺激がなければ、このような意思決定はしなかったのではないか。

このように、図書館にドリフトしていくと、目的を持って来ている同年代の学生に出会うことになる。彼らの姿勢は、自分自身のあり方を反省するキッカケとしては、何よりのものかもしれない。

### 3つ目の偶然：新しい自分に出会う

図書館ドリフトを習慣づけたとき、最後の偶然として期待すべきは、新しい自分との遭遇である。大学生の期間は、おそらく人生の中で最も短期

間に劇的にかわる事が出来る期間だろう。「愚者は自己の経験に学び、賢者は他者の経験から学ぶ」という趣旨の発言は、確かビスマルクによるものだったと記憶しているが、まさに、他者の経験から学ぶうえで文献を読むこと以上の方法はないのではないか。

自分自身が日々変わりつづけている時期に、多くの他者の経験を手に入れられる習慣を持っていたものは幸いといえるのだろう。というのも、もし他者の経験を省みず自身の経験にのみより変わり続けている人がいるとしたら、その人は、既に過去に多くの人が経験したであろう失敗に、相変わらず直面してしまうかもしれないからだ。だからこそ、社会人として責任ある立場になる直前の学生時代には、多くの他者の経験を学び取って欲しいと思う。

さらには、基本的には図書館が一人で利用することを前提としている点も、幸いといえる。友人同士や恋人同士で図書館を利用している人たちを、試験前以外はほとんどみることがない。つまり、図書館という場所は、他者の経験を学ぶ上で適しているばかりか、他者の干渉を受けることなく自身を見直すうえでも適した場所なのである。一人でいることは可能な限り避けなければならない、という現代の風潮のもとではこのような内省の時間を確保するのは困難である。その点、一人になる時間を否が応でも確保出来る図書館という空間は、新しい自分に出会う場所としての役割を担っているだろう。

### 図書館ドリフトの帰結

ここまで、空いた時間に図書館を利用すること、そのことを習慣づけることのメリットを強調してきた。それは、新しい知識や、今までの日常では経験しなかった刺激を得る上で図書館というものが、どうやら有効だろうというものだった。

もっとも、ここまで述べたような偶然に出会うためには、図書館にいったみないことには始まらない点に注意して欲しい。まずは、何はともあれ図書館に足を運んでみることに。でもそのときは「図書館にいったやる!」という意気込みではなく、「ちょっと図書館へ…」くらいの感じで全く構わない。経営学には「計画された偶然」という言葉もあるが、やはり、図書館で遭遇するかもしれない偶然には、図書館に行くことでしか出会えない。ぜひ、学生の皆さんには図書館ドリフトの習慣を身につけて欲しいものである。